

自ら課題をつくり出す力の育成

～「つくりだす」喜びを支える感性的な関わり合いをとおして～

西原 有香莉

学習指導要領では、育成を目指す資質・能力の3本柱のそれぞれに「創造」が位置づけられたことから、「創造性」を育むことが図画工作科で担う役割であることは、明らかである。造形的な表現活動において、子どもは自分なりの表現を追い求め、試行錯誤する。それは、まさに「創造力」を発揮すると共に育んでいる姿でもある。その姿は、「つくり出す」ことの喜びが支えているのであり、活動過程の中で「表したいこと」つまり「自らの課題」をつくり出していく力が、より豊かな創造へと子どもたちを導いていくと考える。そこで、自己のものづくりへの介入を実感できる素材として液体粘土に着目し、題材の開発を試みた。活動が進むにつれてできていく多種多様な“かたち”を目の当たりにした子どもは、それが、自己の素材への働きかけによって生み出された“かたち”であることの実感をしている様子であった。その実感は、自他の表現の意味や価値の気付きへとつながっている様子であった。それは、素材や場、空間といった子どもを取り巻く環境や、他者、そして自己との多様な感性をとおした対話を繰り返しながら、自分なりの表現を目指し、探究する子どもたちの姿が見られたことから感じられた。

キーワード：課題設定力、液体粘土、創造、感性

1. 研究の目的

子どもは、幼い頃より感性をとおして身の回りの環境と関わり、世界の認識を形成していく。図工科教育において、とりわけ、土遊びなどのような造形遊びでは、全身の感覚を働かせた感性の教育が行われている。造形遊びは、主体的な学びを特徴としていて、つくり出す喜びを味わうと共に、形や色を思いついたり、工夫したりしながら、自分なりの表し方を見つけていく。素材や場、空間と関わる中で、「ああでもない。」「こうでもない。」と試行錯誤しながら、自分なりの表し方を追い求め、実現に向かって活動するのである。

この活動過程においてつくり出され続ける作品は、それぞれの学びの成果物であると共に、個性が表れた表現物であることから、子どもたち自身を映す鏡であるとも言える。そして、自己の投影でもある作品、または造形活動途中の成果物が、価値あるものとして気付くことが、自分なりの表現を生み出すことへの喜びにつながるだろう。また、その経験は、「つくり出す」こと、つまり創造していくことへの原動力ともなると考える。

平成29年度告示学習指導要領において、育成を目指す資質・能力の三つの柱、それぞれに「創造」が位置づけられていることから、創造性を育むことが、図画工作科が担う役割であることは明らかである。子どもたちが、素材や場、空間などの様々なことやものと関わることで自ら発想し、工夫して活動を展開していく学びを実現するためには、絶えず、目の前にある造形物に、価値や意味を見出していくことが鍵となる。さらに、そのような活動は、子どもたちがもつ豊かな身体感覚に支えられた感性を働かせることで展開されるのである。

図画工作科の時間の中では、素材や場、空間といった、子どもを取り巻くあらゆる環境と、子どもの柔軟な身体

が出合いを果たすことで、感性的な関わり合いが行われていく。その中で、子どもが創造的に活動を展開していくためには、「表したいこと」を見つけること、つまり、自分なりの課題を生み出していくことではないかと考えた。子どもの柔軟な身体が環境と関わり合う中で、元から持つ感性がさらに磨かれ、より自由で豊かな想像力を持ち始める。そのようにして磨かれた感性や、それに支えられた想像力を発揮することで、「表したいこと」の実現を目指し向かい始めるだろう。さらに、「表したいこと」の実現により、自らつくり出すことの価値や意味を実感した時、図画工作科だけではなく、あらゆる分野において、自ら創造していこうとする態度や力が養われていくと考える。

上記のことを踏まえ、本研究では、自ら課題をつくり出す力が創造性を育むことに機能すると考え、研究仮説を以下のように設定し、その題材の開発と検証を試みた。

自他の表現や活動の意味や価値を視覚的・触覚的に実感することにより、イメージの創造における探究力を育むことができるだろう。

2. 研究方法

自ら課題をつくり出すことを支えるのは、「～したい」という子どもたちの造形への欲求である。「～したい」を生み出すために、環境との感性的な関わり合いの中で、自己の表現や活動に価値や意味を見出すことが重要であると考えられる。また、子どもが自ら設定した課題を実現し更新していくためには、活動に伴って、知識・技能が子どもたちの中に蓄積されていくことも、欠かすことができない。そこで、以下の2点を本実践の主張点として述べる。

2. 1. 液体粘土の魅力

本実践を行ったのは2学期で、本実践の子どもは、油粘土や紙粘土による造形活動を、1学期に経験済みである。そのような粘土は、可塑性の高さや、何度もやり直しができることによる試行錯誤可能な素材であることが魅力であるが、今回は液体粘土を扱った。液体粘土は、その名の通り液体状であることから、子どもたちの働きかけがそのまま形として残らない。だからこそ、固まった時のわくわく感を味わったり、どろどろの液体から質の異なる立体が生み出されていくところに創造の意欲が掻き立てられたりすると考えた。

また、液体粘土のどろっとした感触は、泥遊びで体験した感覚を彷彿させ、この感触は、本題材に挑む子どもたちに心地よい感覚を与えることを予想した。この液体粘土を、本題材では不織布にしみこませた。時間を置くことで、どろどろとしていた液体粘土や柔らかな不織布は固まり、質の変化が見られる。この素材の変容を目の当たりにすることは、同時に自らの素材への働きかけを認識することにもなると考える。このような身体感覚を通した素材体験が、子どもたちの豊かな感性に揺さぶりをかけ、さらに新しい表現に向かって活動しようとする意欲を掻き立てていくと考えたのである。

2. 2. 表現方法の広がりや深まりを目指した場の設定

本実践の子どもたちのよさは、新しいことに対して、臆さずに挑戦していける力があることである。課題は、友達の活動や表現になかなか興味を示せない子どもがいることである。自分にとって価値のある表現を生み出しているという姿勢を支えたいが、その中でも、他の価値ある活動や表現を生み出している「他者」が存在するという事実、心のどこかで気づいておいてほしいというのが、担任の願いである。その事実をもっておくことで、必要に応じて友達の表現や活動を目にすることができ、自分の表現がより豊かになると考えるからである。

このような事実から、4月当初より、友達同士の表現や活動を見合ったり紹介し合ったりする時間や場を、意図的に設定した。そのことにより、活動や表現の仕方に迷ったら、友達と関わりに行くことで、自分なりの表現を見つけようとする姿が増えていった。

そして、本実践でも、豊かで自由な発想によるイメージの実現を支える技法や造形操作の方法の広がりや深まりをねらい、必要に応じて見合える「場（空間）」の設定をした。イメージがなかなか実現できない時には造形のヒントとなり、自分では気づかなかった造形活動に気付いた時には、表現の幅を広げることにもつながると考えたからである。さらには、自他の表現や活動それ自体のよさへの気づきを促し、「もっとこうしてみたらどうだろう。」という思いも誘発されるであろうことも予想した。

また、子どものイメージを実現しやすく、より自由で豊かに表現活動できる「場（空間）」であることにも留意し

た（図1）。

2. 3. より深い表現の探究に向かう題材計画

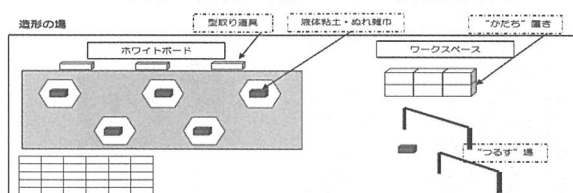


図1 必要に応じて見合える場

より深い表現の探究に向けて、以下の3点を考え、題材計画を立てた。

1つ目は、造形遊びによる素材体験から立体造形へと発展的な題材構成である。造形遊びによる素材体験の充実の中で体験的に素材の特質を学んでいくことで、後半の立体的な造形活動において、自分なりの表現のより深い探究を支えると考えたからである。

2つ目は、制作の各段階で鑑賞活動を行うことである。それにより、表現主題の形成を促すと共に、その探究のための技法や様々な造形操作の方法の獲得を促すと考えたからである。

3つ目は、新たな造形活動可能な「場（場所）」を適宜与えていくことである。それにより、子どもたちの創造性が刺激され、これまでの学びが活用・発揮されると共に、表現方法の広がりが見られることを予想したからである。

以上の3点をふまえ、実践をした。

3. 授業の実際

題材計画（全11時間） 本時9/11
第一次
とろ〜りねんどの魔法を知ろう
①②とろ〜りねんどの魔法を体験しよう
③⑤とろ〜りねんどの魔法でいるんな
“かたち”をつくってみよう
とろ〜りねんどの魔法の世界から
第二次
飛び出してきた不思議な生き物をつくろう
⑥軍手に魔法をかけよう
⑦⑩魔法の世界の不思議な生き物をつくろう

3. 1. 造形遊び的な造形活動により、素材に関する知識・技能の体験的な獲得をねらう

3. 1. 1. 不織布ってどんなもの？さわってみよう！（第1時）

本題材における価値の1つは、“質の変化”の体験である。子どもたちはやわらかな不織布が、液体粘土によって全く質が異なるということを、より強く身体感覚に印象付けられるよう、初めに不織布の素材体験を行った。

まずは、不織布に触れずに見た感じの印象を話し合い、次に、不織布を配布し、印象を確かめる時間をとった（図2）。

不織布を持った子どもたちは、破ったり、くるまったり、窓際に行って風にあてたりする姿が見ら

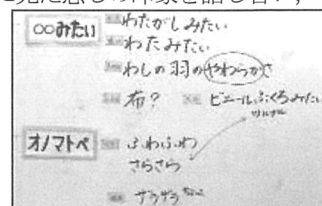


図2 不織布の見た目感じや触れた印象

れ、不織布の見た目から感じた印象を確かめている様子であった(図3-1, 2, 3)。



図3-1 風にあてる



図3-2 上から落とす



図3-3 身体の様々なところで触れる

子どもたちが不織布に触れた時の気付きを、以下に示す。

【不織布に触ってみて・・・】

- ・やぶると、やぶったところがふわふわしている。
- ・裏表で、さわった感じが違う。毛筆の紙みたいな・・・
- ・鉛筆で書ける！
- ・丸めても、また戻る！（紙のようにぐしゃっとならない）
- ・どんどん折って重ねると、見えなく（透けなく）なるよ。
- ・くるまると、雲に包まれているみたい。

3. 1. 2. ころ～りねん土のまほうを体験しよう(第2時)

不織布の感触を確かめた後、液体粘土を浸み込ませて造形活動を行った。あらかじめ、不織布を液体粘土に浸み込ませ固まらせたものを見せると、子どもたちは驚いた様子であった。ペットボトルにかぶせた形状に固まらせたものを見せたが、しわがそのまま残り、中は空洞であるにもかかわらず、ペットボトルが中にあるかのような形に興味津々の様子であった。感触を確かめようと触る子どもも多く見られた。

それから、液体粘土に触れる活動に移った。触れた瞬間、子どもたちは「どろどろしてて、気持ち悪い～！」「べとべとする。」などといったように、ネガティブな感想を述べている子どもが多かった。しかし、活動が進むにつれて、液体粘土のどろとした感触を徐々に楽しみ始めている様子が見られた。

振り返りには、図4のような内容を書いている子どもも数名いた。

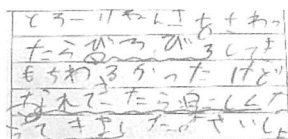
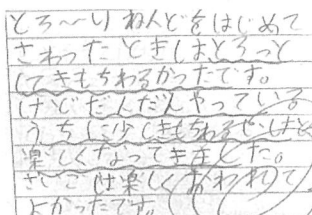


図4 ふりかえり



まずは、液体粘土の特質を体験するという目的で、本時では、皆、ペットボトルの型取りを行った。その中で、「そのままの形に固まる」という特質に着目し、固まった“かたち”を予想し、実現させようと造形活動する姿が見られた。(図5)

金曜日に授業があったので、子どもたちが自分の作品と再会するのは月曜日の朝となった。2日間の休みを経た液体粘土と不織布は完全に固まっており、登校してきてすぐ、自分の作品に触って確かめ、「カチカチになってる！」と驚いている様子が見られた。そして、固まった作品をペットボトルから抜き取ると、本当にそのままの形やしわが残っていることが再認識され、液体粘土の特質や不織布と液体粘土の質の変化を感じ取るように、色々な方向から見たり、触ったりする姿も見られた。図5



図5 固まったかたちを想定した造形活動



図6 図5の子どもの作品

3. 1. 3. ころ～りねん土のまほうでいろんな“かたち”をつくってみよう(第3時)

前時の振り返りの中で、「ペットボトルじゃなくて、もっといろんなもののかたどりをしたい。」と書いていた子どもが多数いたことから、液体粘土の特質に興味を示し始めていることを確信した。そして、ペットボトル以外にも、角柱・円柱、角錐・円錐、球などの形や、卵パックやプラスチック製のカップなど、身近な形のものを用意し、改めて、型取り活動を設定した。活動を見ていると、様々な形を組み合わせている子ども(図7)や、前時につくった“かたち”にさらに組み合わせて新しい“かたち”をつくり出そうとしている子ども(図8)が見られた。



図7 形の組み合わせ



図8 かたちとのかたちを組み合わせる

また、第2時までの経験を生かした場面も見られた。図9の子どもは、ねじって持ち手のようなものをつくっている。これは、第2時までに経験した、液体粘土と不織布の可塑性を活かした活動であり、また、この表現方法は、他の友達が試していた方法でもある。友達の表現のよさに気付いてその方法を聞き、自分でも試しているのである。



図9 友達の表現のよさに気付き活動



図10 前時までの反省を生かした活動

また、図10の子どもは、第2時に液体粘土をつけすぎていたことから、上手く型取りできなかった経験を活かし、量を調節しながら丁寧に型取りしている。



図11 友達との対話の中で表現を生み出す

図11の子どもは、友達とアイデアを出し合いながら活動している。活動を見ていると、たくさんの表現方法についての会話が繰り広げられていた。その中で、2人共、不織布を膨らませて側面にくっつけることで、ポケットのようなものを完成させることができていた。これも、可塑性を活かした表現であるし、両者が同じ表現を取り入れていたことから、会話によって生み出された表現の成果物であることの実感の表れであると考えられる。

以上のような姿から、子どもたちは、素材体験の中で自己の活動を省察しながら、素材に関する知識や技能を蓄積し、さらに活用・発揮しながら活動していたと考えられる。また、必要に応じて、他者との対話をしながら、表現の幅を広げていた。

3. 1. 4. “自分だけ”のかたちを“もっと”つくろう(第4・5時)

“かぶせる”“つつむ”という方法によってできた“かたち”を見合う中で、「自分だけの形ができた!」といううまの発言があった。この発言は、それぞれに違ったかたちができていることへの気付きだけでなく、“自分がつくり出したかたち”に特別な感情を抱いている発言であるとも考えられる。この子どもによる発言を取り上げ、「“自分だけ”のかたちを“もっと”つくろう」と子どもたちに投げかけた。



図12 つるす場

また、この第4時では、これまで型取りしてきた方法に加え、さらに“つるす”という方法を提示した。図12の

ような物干しざおを設置し“つるす”場を用意した。ここでは、針金ハンガーや洗濯ばさみなどを使ってつるし、“かたち”をつくっていく。

前時までの“かぶせる”“つつむ”の方法によって、もっとつくってみたい“かたち”が子どもたちの中にはまだあったようで、“つつむ”“かぶせる”をし続けている子どもが多かった。

“つるす”場では、前時までの経験を活かした活動が見られた。図13の子どもは、ハンガーを2つ使って不織布をつるしていた。また、単に“つるす”だけでなく、“ねじる”ことを加えていた。その子どもからは、「そのまま、やってもおもしろくないので、ねじってとめました。」という言葉が聞かれた。

また、図14の子どもは、洗濯ばさみで不織布をつるすだけでなく、そこにプラスチック容器を組み合わせて新たな“かたち”づくりを試みていた。どちらの子どもも、

“自己の働きかけがそのままかたちとして表れる”という液体粘土の特質の理解と活用をしている姿であったことや、これまでの経験から新しい自分なりの表現を生み出そうとしている姿であったことがいえるだろう。



図13 “つるす”にねじる工夫を加えた表現を紹介する姿



図14 友達とのかかわりからできた表現を紹介する姿

また、図14の子どもは表現方法の紹介をする時に、「自分で考えたところと〇〇くんが教えてくれたところがあるんだけど・・・」という発言があった。この発言から考えられるのは、友達とのかかわりに価値を見出しているということである。図14の子どもの中では、“友達と一緒にすることで生み出すことができた自分なりの表現”ということが、大きな出来事だったのではないかと感じている。

3. 2. 造形遊び的な造形活動における学びを生かした表現活動

3. 2. 1. 軍手にまほうをかけよう! 見たこともない“かたち”できるかな(第6時)

軍手を様々な“かたち”にして、液体粘土をしみこませるという活動を行った。液体粘土の使用によって、影絵遊びなどの手遊びではできない“かたち”をつくりだせることを利用して、“かたち”づくりを楽しむ。この時点で、すでに“見立て”を行いながら、活動している子どもがいた。

図 16 をつくった子どもの振り返りでは、「くねくねぐちゃぐちゃ動かしてたら、うさぎさんになった」とあった。また、図 17 のように、まだこの時点では、何にも見立てていないが、「おもしろい」と思う“かたち”をつくり出している子どもや、前時までの方法を活用して“かたち”をつくり出した子どももいた。

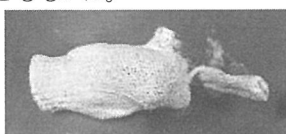


図 16 軍手によるかたち
(おもしろいゆたち)



図 15 軍手によるかたち
(うさぎへの見立て)



図 17 軍手によるかたち
(前時までの方法を活用したかたち)

3. 2. 2. 魔法の世界の不思議な生き物をつくらう (第7・8・9・10時)

これまでの造形遊び的な表現活動を生かした造形活動として、立体的な表現活動を行っていく。活動内容は、液体粘土によって固まらせた軍手を見立てることで、“不思議な生き物”づくりをすることである。ここでは、前時までに作り出した“かたち”を積む、並べる、重ねる、切る、貼るなどをする姿、ほしいパーツづくりの為に、新たに“かたち”づくりをする姿、直接不織布を軍手に張り付けていく姿などが見られることを予想していた。このような造形活動を試みる中で、それぞれが表現主題を形成していくと共に、その表現主題に向けて造形的な探究が行われていくことをねらっていたからである。

これまでのかたちづくりにおいて、人形や動物、おばけなどに見立てている子どもがいたという事実から、軍手のかたちを何らかの生き物に見立てていくことが、学習の流れとしてでてくることを予想していた。しかし、テーマを子どもたちと共有した際に、難色を示す子どもが多くいた。その理由として、これまでのかたちづくりの中で、何らかのものに見立てながら造形活動をしていて、つくりたいものがあるということや、軍手のかたちを生き物以外のものに見立てていたことなどが挙げられる。そのような事実から、生き物づくりにこだわらず、そして、子どもたちの使いたい“かたち”のパーツを使用して、立体による表現活動へと方向転換をした。そのような段階を踏んでつくり出された作品を、以下に示す(図18, 図19)。

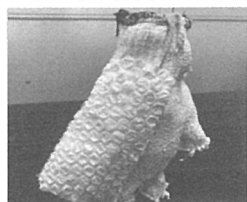


図 18 たこたこ星人

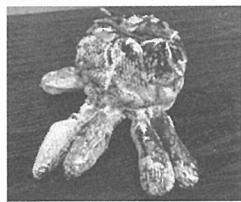


図 19 動く島

4. 授業の考察

4. 1. 個の深まりと協働することによる学びの広がり

身体感覚における対象との対話の中で行われる知識・技能の獲得に向けた探究と、獲得した知識・技能の活用による新たな表現を探究する姿が見れた。

前者は、主に個による様々な活動を展開していく中で見られることが多くあった。活動することで自己にもたらされる感覚に対し「うわぁ」といった、身体の内側から無意識的に発せられる言葉が多く、一心不乱に素材と触れ合っている様子が観察できた。

この時の活動後の振り返りは、「においをかいでもなにもなかった」「ねちょねちょして気持ち悪いけど、だんだん気持ちよくなってきた」「かわくとサラサラというかカサカサしていた」「不織布に浸み込ませる液体粘土が多すぎてもだめ」「型取りをして、その上から液体粘土を足す(たらす)とうまくできる」というものであった。このことから、子どもたちは、素材の特質や造形への知識・技能を身体感覚として獲得していったと言えるのではないだろうか。子どもたちは、知らず知らずのうちに、これまで経験してきた素材に関する知識と比べ、今までに体験したことのない素材を前に、とにかく触れてみることで、特質を身体で感じ知り得ようとしているようにも感じられた。

後者においては、協働による造形活動が大きく作用する場面が多く見られた。図 20 の作品の右上には、帽子のようなものがある。これは、麻の紐を液体粘土に浸してカップに巻き付けることで、形状を固定させてつくられたものである。しかし、これは図 20 を制作した子どもが考え出した方法ではない。他の子どもが図 21 のようなかたちをつくり出し、麦わら帽子のようなかたちができたということを、全体場で伝えた場面が、図 20 のかたちができる以前にあったのである。しかし、表現は全く同じではなく、図 21 は、紐が不規則にかけられているのに対し、図 20 は同じ方向にぐるぐるとまかれている。このことから考えられるのは、図 20 をつくり出した子どもは、図 21 のかたちをみたことから、液体粘土の特質をより深く理解し、自分が表したいことに向けて表現の仕方を探究し、結果、自分なりの新たな表現方法を生み出したということが考えられる。

また、図 22 は、液体粘土をひたした紐を“つるす”場で固まらせ、紐が立ち上がった形状を完成させた作品である。この作品をつくり出した子どもは、はじめは紐を固まらせることや、“つるす”場には

興味を示さず、不織布による造形活動を行っていた。しか

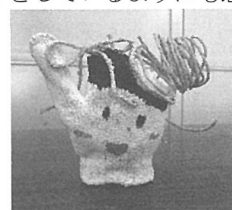


図 20 友達の表現を基に
自分なりの表現を生
み出した作品

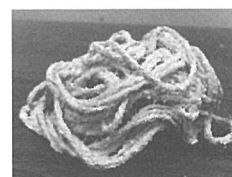


図 21 図 20 の表現の基と
なったかたち

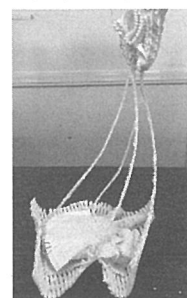


図 22 素材や表現方法
に関する知識・技能の
獲得により生み出され
た表現

し、3. 1. 4. であったような“つるす”ことでできる波打ったかたちや、紐が、そのままのかたちで固定されたかたちを目の当たりにしたこと、さらに自分なりの表現を生み出そうと、造形活動の場を広げていたのである。その結果、素材や固まらせ方を変えることで、新たな表現の方法を生み出すことに成功したのである。

ここで、前者の探究と比べて明らかに違うのは、思考が入っている事である。前者は感覚的に活動し、感覚として知識・技能を体得していつているのに対し、後者では、獲得した知識・技能を意図的に活用し、造形活動を行っているのである。これらの姿は、造形遊び的な表現活動を前段階として設定し、発展的に立体による造形活動を設定した題材計画が、作用したからではないかと考える。また、友達の作品や活動を必要に応じて見合え、子どもから生み出されていく豊かな発想に応じて造形活動可能な場（空間）であったことの効果であったことも実感している。

4. 2. 対話が育む課題設定力

友達と必要に応じて見合える場であったことが、次に自分が試したりつくったりしたいことを見つけていくことに、上手く作用していた様子も見られた（図23）。



図23 友達との対話によって自分なりの課題を見つけていく姿

図23の左の子どもがしている活動を、右の子どもが見て、後追いする形で造形活動している様子が見られた。また、見るだけでなく、互いに表現をめぐる対話をしながら活動する姿もあった。振り返りには、「アイデア教えてくれたから、やりたいことが見つかった」といった内容が、両者に書かれていた。このことから、他者との表現をめぐる言語による対話や、造形物を介した感性的な対話が、次にしてみたいことを見つけていくことに作用していたことがわかる。

しかし、図24の子どもは、友達の表現にはあまり目も

くれず、黙々と造形活動をしていた。様々な素材を持って来ては試し、時折何か考えている様子を見せて、また試すといった様子が観察できた。この子どもは、図21の表現を生み出した子どもである。自己の働きかけを実感しながら、素材と向き合い、個人内での対話が繰り返されていたことが分かる。

このような実態から考えられるのは、自分なりの課題は、

対象を通した自己内対話が活発に行われることで生み出されていくということである。友達との対話から生み出されていった課題は、一見、模倣や協働によって生み出されていったようであるが、友達の活動の中でも自分の感

性の基で、試してみたいこと、表してみたいことが選択され、活動に表れているのである。活動も、全く同じではなく、その子なりの工夫が加えられており、そのような事実からも、友達の表現から身体感覚に刺激を受け、自分なりの課題設定が生み出された結果であるといえる。

また、ひたすら対象と向き合い、自分なりの表現を追究していく姿は、まさに、対象を通した自己との対話である。

「次は、どんなことをしようかな。」と考えるのは、「自分は、どんなことをしてみたいのかな。」という自己への問いかけである。そして、表れていく造形の成果物は、自己の感性によってつくり出されたものであることから、自分自身をつくり出していつているともいえる。そのつくり出されたものによって刺激を受け、また新たに想像していくことは、まさに、自己と自己の対話によって、課題が生み出されていくことなのである。

自分なりの課題は、対象や他者との多様な対話がある中、もう一度、自己との対話が丁寧に行われることで、生み出されていくのではないだろうか。「自分は今、何をしたいのか。」「どんなことに向かおうとしているのか。」などといった、心の動きが課題をつくり出し、そのことに真摯に向き合えることが、課題設定力につながっていることが感じられた。

5. 成果と課題

本研究をとおして感じていることは、自己のものづくりへの介入を実感することの重要性である。子どもは、感性的な関わり合いの中で造形活動をしていくのだが、自分なりの表現をつくり出している事実と、その価値を子ども自身が実感していくことが、「つくり出す」喜びを支えることや、創造力を育むことに繋がっていると感じたからである。その点において、本研究における、液体粘土の素材や、題材計画、場の設定は有効に働いたのではないかと考えている。そして、自他の活動のよさの実感は、他教科にも広がりを見せ、協働することに意欲的な場面も増えていったのも、成果として考えられる。

一方で、本題材の後半における、立体的な表現の際、「不思議な生き物」というテーマ設定をしたのだが、子どもたちには、表したいことがすでに決定しており、不要であった。子どもたちのもつ感性は、私の想定よりはるかに豊かで、題材前半の素材を通した自己との対話が活発に行われた結果、自分なりの課題をつくり出すことができていたのである。

今回、つくり出すことの喜びを感じることや、自ら創造していくことへの価値や意味の実感には成果があったと感じている。しかし、その気づきを次の表現活動に十分生かすことができず、テーマ設定により子どもたちの創造的な活動を狭めてしまうことになる可能性もあった。より豊かに感性を働かせることで、子どもたちの創造に向かう力や可能性を引き出す研究を続けていきたい。



図24 自己内対話により、課題を生み出す姿